

煙一五三、港帆影三八九、鹿六
 六、霜一〇七、二九七、三三三、社頭一
 遊野一七九、一〇、春野一八
 熱田大宮司 七九
 吾妻橋 一一一
 霞一〇、三三、二八七、三六、三三三、風
 前一二、竹近間一〇〇
 嵐 山家一六六、洲光晴一七六
 一山三六
 藍川花 三三三
 菖蒲 五、一露六、三堀切の一三
 綾瀨靜照 一五四
 燈一の子二九
 餘花(殘花さす見ヨ) 尋見一一
 三三
 天野景昌 三八四、七四九
 天城晴雪 二八九
 曙 霞七八、三五八、一露八、一菊一
 〇六、一夢九九、一時雨九三、一春一
 一三、山春一七七
 庵主の遺曆の賀二二
 一覽(非手ヲ見ヨ)

蓬 初戀三三
 扇 一六三、三三、三三、一風三六、一
 の芝の古跡(三三三)
 葵 四、二五九、三三、三三、三三
 朝 一蓮一八四、春雨、一八、一七、一
 花五、二、二七、子規三三、一落葉
 一四五、一于島三三、一若菜三一九
 一風七三、一霞三三、一七八、三五八、一
 鶴二五、三三八、一露三三、一五〇、一
 四九、三五、二九三、一柳、二九、一三、一
 一水二二、一霧七三、一雪七八、一水
 鳥三三、一霜六六、一三、一五、一七
 二二、一三、一日に露三三、一蟬三三
 七、一春一六〇、夏一三三、一八〇、三
 〇五、元日の一七三、冬一四八、二八
 七三、三三、雪一五三、三〇、新年一
 七、三三、後一一三
 一顔種八、一六〇
 一日の里(七三)
 淺 紅葉一九三
 一野真重 七九
 一草にて 一一七
 秋(初秋と暮秋はヲ見ヨ) 四、
 七五、一庭一九〇、一鳥九八、一河望四

六、一風三〇七、一野風三三、一風三九
 一月一〇五、一四三、一七六、三三〇、一露
 一六三、一蟲八三、一六二、一六三、一八五
 一海、一三、一望四六、一山三三、一
 雨六六、一與一六七、一夕四〇、一五七、五
 九九、一六五、一夢二〇七、一水一〇四
 一霜、一四、一三三、一三三、一閑居一
 九、田家一三三、一田家早一三八、油
 一四〇、一瀬戸一七六、一立一六二、一
 三六、一蟲告一六〇、蟬聲近一六二、
 山館一四六、一の頃物(行道に
 て三三、山路一行七五、一自登高一
 四、一懷舊一〇五、一〇六
 一葉の社三九、一九六、一葉紅楓一五
 四
 一(爲岩間ヲ見ヨ)
 一若一三〇、一の霜漬七六
 雨(雨中雨後、春雨は五月雨さ
 時雨ヲ見ヨ) 五九、一三三、一三九
 二七、一七三、一九九、一萩一六三、一郭
 公八三、一三三、一三三、一歸雁一〇九、
 中若竹三三、一夜三六、一竹一〇〇
 一鶯、一七、一九九、一四四、一柳三三、
 七九、一九三、一景三三、一新樹六三、一

一三、一のふる日一七三、一四一、一紅
 葉一四六、一庵一三三、一驟一三、一渡
 一三三、一海邊一三〇、一九四、夜一
 一三、一三、一梅一三三、一三三、一露二
 三、一夏夜一三六、一三三、一三三、冬一
 一〇〇、古渡一三三、一秋一六六、一鶴中
 一三〇、夕一三三、一淡一八九、一水邊
 一〇九、水郷一三〇、一竹風如一三
 一五、小泉夜一七六、一水神涼一五三
 一三、一三、一枯一三三、一江寒一三三、
 寒一風三三
 綱代 一一、一三、一三、一三
 相思 二五
 安藤幸輔が父の七十賀に 一三五
 行在所 三三、神戶の一三〇六

さノ部
 菜(なヲ見ヨ)
 一近三三、一竹一九五、一旅行
 一三、一松一七三、一雪一〇三、
 三三、一田家一七三、一五二、雪中

一八八、惜一一三三、一述懐
 歳旦(元日)ヲ見ヨ) 三三三
 四郷の亂平定 三〇
 西京 一三七、一にて都路を見る
 四四
 澤 一紫二〇四、一若菜三三、一餘寒七
 八、一鶴三二八
 里 一梅一四八、一砧三〇八、一春一七八
 佐藤 一賦五八、一三三、一捨三一
 二二
 猿 樵路一八五
 一澤の池 一四一
 早秋 二九六
 盛花 三三三
 杯 寄一祝一三三
 八八、社頭一三三
 一家の花三三
 一博士三三三、一絆君の三三三三三
 六
 相摸の國 二五、二九二、二九九
 貞宮内親王 二七七
 早苗五九、一多一八五、一夕一一
 一四、水村一一八九、一採一一九五

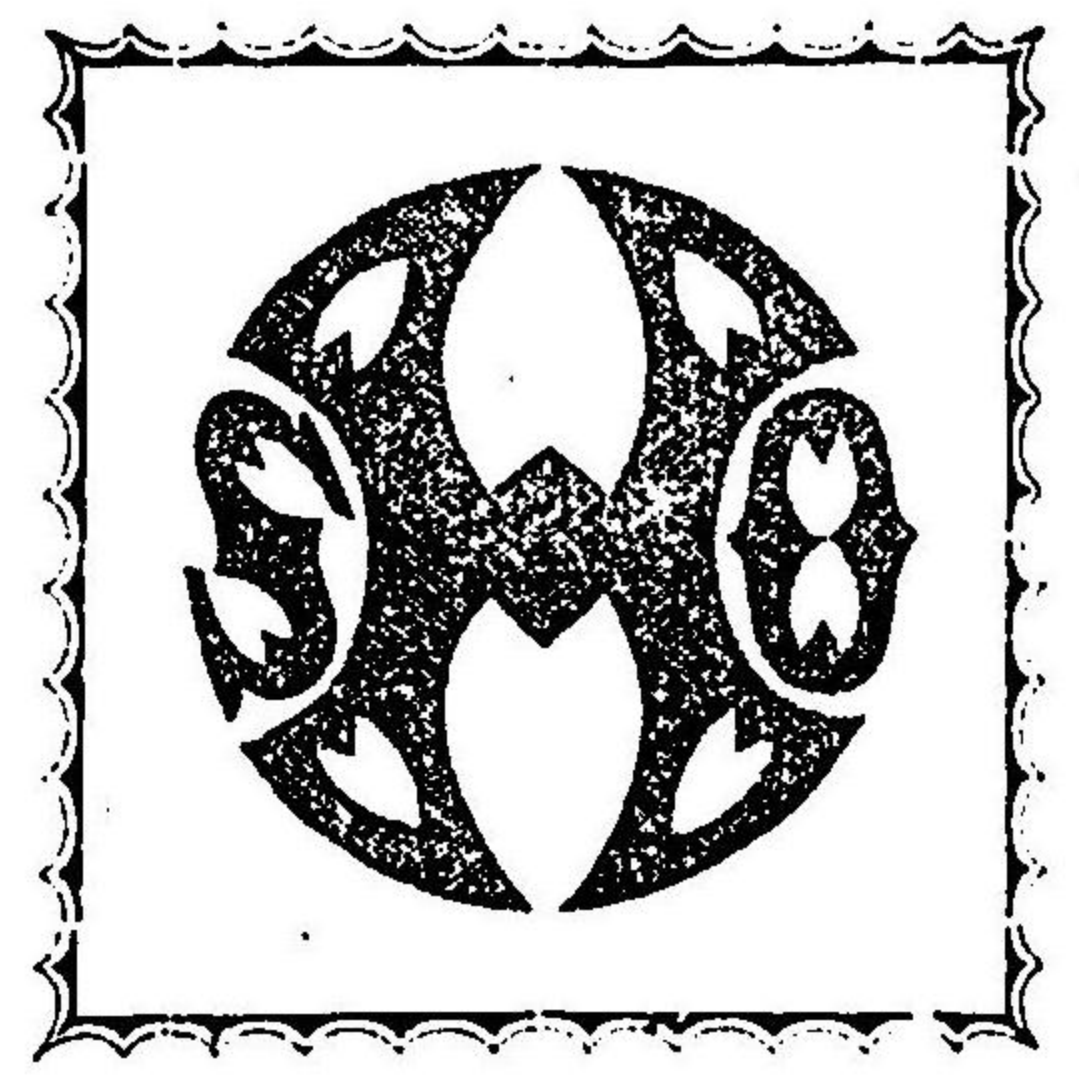
眞田幸村の墓 三三三
 一餘一三三
 早梅 三三、一五〇、一六七、一七九、一五、
 一三三
 早秋(新秋初秋ヲ見ヨ) 一一、一蟲八
 三、一田家一一三八
 早春(初春ヲ見ヨ) 一一、一柳三三、一
 山一四九
 櫻 二、一九六、一四五、一三三、一枝四
 四、一庭一一四〇、一水邊一三三、一
 を植ゆ三九、一祝二九三
 四片町の三三、一阿部邸の一三三
 一盛上、一雲一五二
 かに一三三
 酒 七三、一〇四、一四一、一五〇、一〇三、一新
 三三、一新年一七三、一愛一三三、一紅
 葉の蔭に一のむ三三
 五月雨(梅雨)ヲ見ヨ) 五、一六〇、
 一晴三三、一三三
 一寄一戀三三
 一ク谷五八、一三七、一ク谷の梅見九
 一
 眞豆 一〇五
 佐々木 一一、一尙信二八六、一一

古信三三、一三三、一弘綱一六〇
 一弘綱か六十一の賀一一
 産 出 一三三
 山房看菊 二七〇
 散歩 月下 一三七〇
 山中物さひし 一八六
 山家(まかヲ見ヨ)
 三月盡 四
 三年忌(掃墓) 三三六
 三條實英公 一七
 殘 雁一九五
 殘花 三三、一三三、一三三、一何在二
 三〇、一深山一花三〇六
 殘月 三三、一四四、一越關四〇
 殘紅葉 三三〇
 殘鶯 三三
 殘菊 一六七、一九〇、一三三、一三三、一庭一
 一六六、一三三、一海邊 一三三
 殘春 九、一三三
 殘雪 三、一野 一三三、一山 一三三、
 松 一三三、一樹蔭 一三三
 三十年祭(八田知紀) 三三三
 三年祭(吉田利和の父) 九八
 (非伊家) 一五〇

三百年祭(賀島重遠の遠祖) 九九
まノ部
 樹(新樹樹陰)ヲ見ヨ) 一陰月一八
 六、一陰雪一七九、一陰蟬一三三、一陰
 納涼一六三、一三三、一閏月三三、一寒
 一三三、一寒一風三三
 木戸孝九の墓 三三〇
 程中(旅又は旅行ヲ見ヨ) 一眺
 望一〇八、一山三三、一雨三三、
 霧 一八三、一三三、一中雁六六、一障紅葉
 一三三、一八八、一川一三三、一三三、一月一三三、
 海邊 一三三、一三三、一三三、一三三、
 〇、一三三、一三三、一三三、
 基督教會の奉納式 一一〇
 衣上香期 二七四
 砧 里 一三三
 後朝 一三三、一三三
 紙王 三三
 踏履(かヲ見ヨ) 三三、一三三、
 清瀧川 一三三
 一雄 二五六
 清見紀行 三三七
 一盛平 一三六

桃 花二八八、水邊一三九、寄 祝九七 長良川の—花三六 せノ部 晴天鶴 六八、三二六 清女 — 捲簾六二 世路如夢 六三 瀬月 — 秋月二七六、明月二九 ○、嵐の追門二四四 節會 踏歌—七八 雪中 — 友一〇三、五七、若菜 四二、五八、求若菜二七八、 竹一七三、三九八、鶴九五、九六、 鶯聲一七五、梅一〇三、三三三、 早梅六七七七、松二八八、 一眺望三四 夜讀書 七六 松陰(熊谷直清) 一五八 機路猿 二八五 松盤樓の新室ほぎ 七七 招魂祭 三二 社(東山) 三〇 照射 五	關 一五、花三七、郭公三三三、杉 三三三、の藤川三五、殘月越— 四〇、踏秋風三九、 不破の—白川の—七六 一月内兄(人名)六七 蟬 — 聲近秋一六、朝—三四七、新 一三三、雨後—三三六、樹陰—三 六、二六七 觀琴緒 三二七 鏡別(送別ヲ見ヨ) 船中(舟ヲ見ヨ) 戰場 古—三〇二 仙家菊 二六九 千年 鶴哭—一八〇 祭(河原左大臣戀)三六 善光寺 三三二 千家尊福 八〇 先哲祭 一七九 戦捷祝會 三三三 すノ部 ストラースアルク 二八四 慶 — 葵三〇三、慶外祭三〇五、螢入 一八四、涼入—二二、寄—戀一五九、	清女捲—六二 隨意莊の夕景 一三三 水邊 — 春雨一〇九、花—二、 二一九、—螢六四、一五九、八五、 蓮櫻二三三、若菜三四三、竹 三四〇、—夏草三〇七、梅二二 六、—卯花二〇三、納涼二八 三、—山吹二二、紅葉一六三、 一、桃二九、納涼二八三 水郷雨 三〇七 水神涼雨 一五三 杉 關—三三三 勘柄清雄 二七四 炭竈 一三、六七、一九三 住吉 四二、神社二二 隅田川 二六、—の冬月三五三、 —の櫻雲一五二、—堤二六三 靈 五二、五三、—菜三故郷—二一九 燈 — 給の松 二四三 洲光晴嵐 二七六 末松山七〇、 末廣町の秋葉社二九 涼 七、—露三三、風前—二〇六、菊交 一、九四	納涼 一五三、松下—一八七、舟— 二四七夕—三四五、樹陰—一六一、 三三三、三四五 鈴木 — 藤二五八、—乾堂九二、 一、吉造一五七 雀 三二六
---	---	---	---

明治三十九年一月一日印刷
 明治三十九年一月五日發行



著 作 者 故 三 浦 千 春
 東 京 市 本 郷 區 西 片 町 十 番 地
 編 輯 者 吳 秀 三
 東 京 市 日 本 橋 區 通 二 丁 目 十 八 番 地
 發 行 者 芳 野 兵 作
 東 京 市 京 橋 區 西 紺 屋 町 廿 六 七 番 地
 印 刷 者 佐 久 間 衡 治

萩園遺稿奥付
 正價金壹圓五拾錢

發 行 所 東 京 日 本 橋 通 二 丁 目 (電 本 一 千 一 番) 裳 華 房
 特 約 所 大 阪 市 東 區 備 後 町 四 丁 目 吉 岡 平 助
 特 約 所 尾 張 名 古 屋 市 本 町 三 丁 目 川 瀬 代 助

(刷印番英為京東社堂武都)

徳川慶喜公題字。榎本武揚。宮本鴨北先生序
犬養 毅。嶋田三郎。尾崎行雄先生序文
栗本 鋤雲先生著。栗本 秀二郎編纂

匏庵遺稿

第二版

菊判洋裝全一冊
全體七百八十頁
正價 金壹圓五十錢
小包料 金十五錢

幕府の遺老を以て明治年代に異彩を騰げし者これを幕閣にしては勝海舟翁あり之を江湖にしては栗本匏庵先生あり海舟翁の達識偉功もとより曠代の傑なるを失はずと雖も匏庵先生の高風勁節、殊に企て及ぶ可からず而して世人多くは海舟翁のみを浮慕し匏庵先生を説くもの寥寥たるは何ぞや蓋し先生幕末多難の秋に際し身を輿醫より起して外政の局に當り其偉績の録すべきもの極めて多し一旦政變に遭ふや飄然として跡を江湖に收め詩酒優遊自ら聖世の頑民を以て居り絶えて聞達を求めず而かも其學問該博、經史に涉り詩文を巧みにするのみならず閱歷萬端、世故に諳熟するを以て其感想の溢れて文字に表はるゝもの勁拔雅健、趣味極めて饒し本書は則ち先生の遺稿にして隨筆紀行より史傳詩文に至るまで悉く収録せざるはなく以て一部の幕末史に充つべく以て一部の高士傳に充つべし請ふ一讀して其言の虛ならざるを知れ

發行元

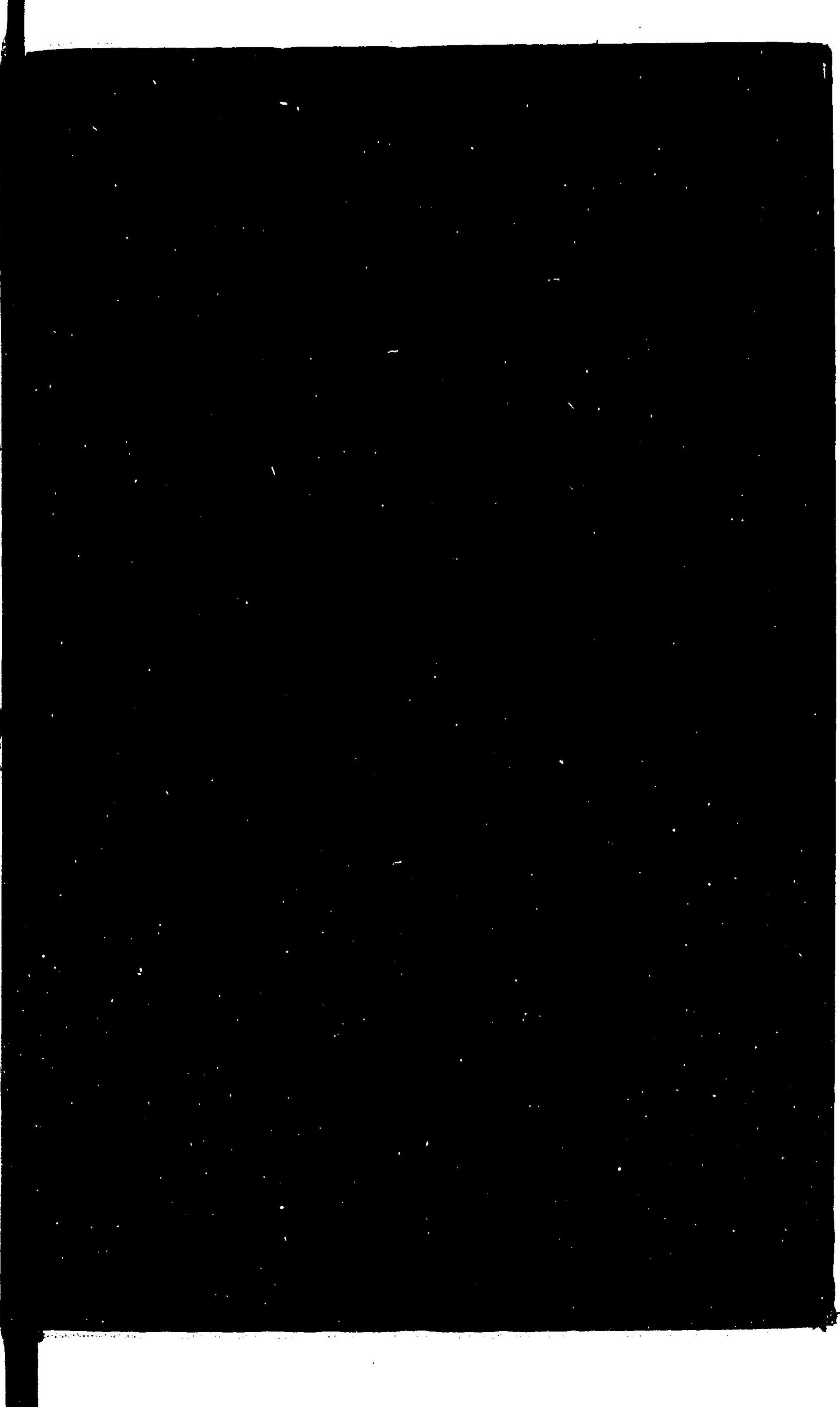
東京市日本橋通二丁目

裳

華

房

99
232



084909-000-6

99-232

萩園遺稿

三浦 萩園 (千春) / 著

M39

DBB-0184



